

魂の
サイレント・ネイビー

シリーズ！艦長・乗員スペシャルインタビュー

【第二十八回】
元第七二一海軍航空隊
「神雷部隊」三〇六飛行隊
海軍上等飛行兵曹

野口剛

サイレント・ネイビー。黙して語らない——、そんな海軍軍人の美学を私たちはこう呼んでいる。だが、果てしない海のロマン、また様々な戦歴の数々、船乗りとして語りつくせない思いは、誰の心も熱くさせてやまないことだろう。当連載では、元海軍軍人、海上自衛官の方々にご登場いただき、その思いの一端に迫ってみたい。

自分がいつ爆弾を積んだ機に乗るかは決まっています。 毎朝、搭乗割で確認するのです。

—今回は昭和19(1944)年に編成され、ロケット機「桜花」を主戦兵器としたことで有名な「神雷部隊」の零戦搭乗員だった野口剛さんにお話を伺います。まず、生い立ちから海軍に入るまでをお聞かせください。

野口 私は大正14(1925)年6月、東京の赤坂で3人兄弟の次男として生まれました。海軍軍人に憧れていたのは、父の仕事の関係で、5歳まで海軍省の官舎に住んでいた影響でしょうね。中学の頃から飛行機乗りになりたかったのですが、民間の航空学校はお金がかかります。そこで「少年航空兵」という制度を知り、海軍飛行予科練習生、いわゆる「予科練」を志願、昭和16(1941)年1月に受験し、合格しました。

予科練には甲種と乙種があり、両方とも合格しましたが、甲種だと最年少になってしまうので、体力的な面を考慮して乙種を選びました。早く軍人になりたかった私は、横須賀鎮守府に申し出て、昭和16年12月の入隊予定を半年早め、土浦に入隊したのは5月のことです。

—太平洋戦争の開戦はその約半年後、12月です。日米の緊張からついに開戦を迎えた時期に当たりますが、予科練の教育訓練はどのようなものだったのでしょうか？

野口 第16期は2年半の訓練期間を2年に短縮され、1年間は土浦で、2年目は三重空で地上教育です。適性検査の結果、私は陸上機の操縦員になりました。予科練を卒業し、出水海軍航空隊に転属(入隊)となったのは昭和18(1943)年のことです。当時はガダルカナル島の戦いが一段落した頃ですが、我々は戦況のことなど全く知りませんでした。

飛行訓練は出水でようやく始まりました。初等練習機ではなく、初めから九三式中間練習機(赤とんぼ)です。12月には機種選定で戦闘機、艦上攻撃機、艦上爆撃機、九六式陸攻や一式陸攻のような大型機の四種に分けられ、私は戦闘機になりました。やはりほかの機種より攻撃精神が旺盛な者が多かったと思います。

まず、零戦の複座(17試練機)で10回位訓練し、離着陸できればすぐ単座に移ります。

零戦の運動性能は素晴らしいものですが、有名な「ひねりこみ」の操作は教えられて分かるものではなく、とにかく体で覚えるしかありません。今のようにGスーツなどありませんから、激しいGで鼻水が出たり、ヨダレが出たり(笑)。酸素マスクのスイッチを入れ忘れて上空で気を失い、降下中に意識を回復したこともありました。私は空母「鳳翔」への発着艦訓練まで、海軍の正規の訓練をすべて受けられましたが、後の期では短縮されてしまったようです。すべて

の訓練を終えた後は、大分と筑波で13期後期の予備学生に教えておりました。

—“疾風迅雷”より名付けられた「神雷部隊」の募集があったのはその頃ですね。神雷部隊こと第七二一海軍航空隊は、特攻機として知られる「桜花」を運用するために編成された部隊です。野口さんはこの部隊を希望しますがそれはどのような経緯だったのでしょうか。

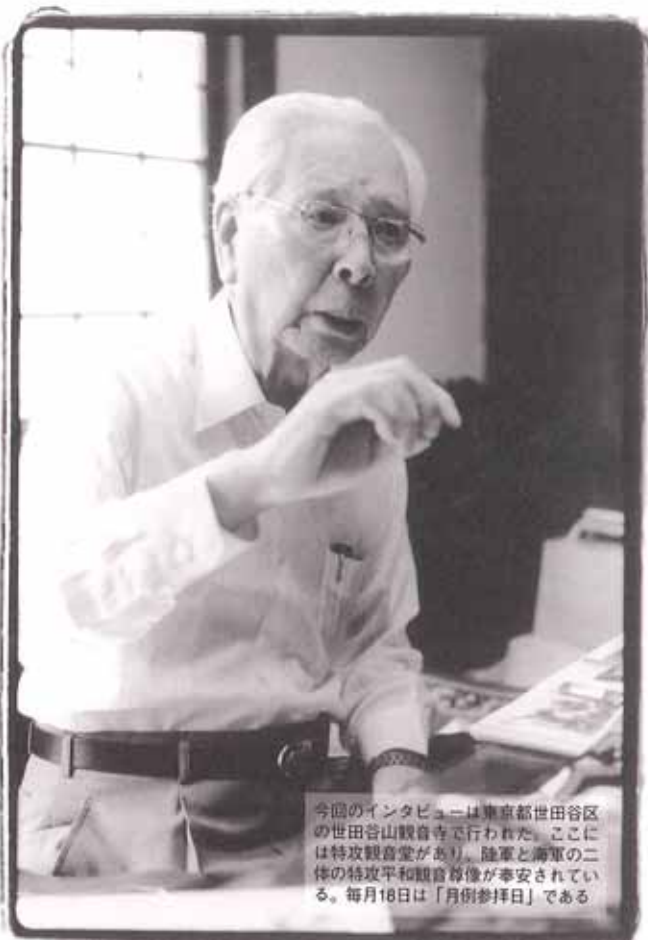
野口 昭和19年の夏、分隊長から「生まれ。日本でこれ以上ない最大にして最高の部隊ができる。その内容は言えない。だが、行ったら生きて帰れない。そこへ行く意志があるか。家族のこと、長男か、片親か、自分は戦闘機でこ奉仕したいなど、諸々考えて、希望か否かを明日までに用紙に記入して提出せよ」と言われました。そこで仲のよかった同僚

島山と、「よし一緒に行こう」と希望しました。どのような部隊かそのときは分かりませんでした。私は次男ですし、迷いはありませんでした。

希望を出したまま、三沢で教官をしていたとき転動命令が出て、11月に茨城の神ノ池基地へ行くと、そこは荒涼とした砂だらけの飛行場でした。隊門の「第七二一海軍航空隊」、そして「海軍神雷部隊」の門札を見て、「どうとう来る所へ来たな」と同僚と意を決しました。上官に報告に行くと「貴様たちは戦闘機乗りだから三〇六飛行隊へ行け」と言われました。

—当時「桜花」は発案者の大田少尉の名から、秘密保守のため(天)(マルダイ)と呼ばれていました。機首に1.2トン爆弾を装備し、後ろにロケットエンジン3基を備え、プロペラもありません。この異形の特攻機を初めて見たとき、どう思われましたか。

野口 当初は「神雷部隊」の任務も、「桜花」のことも分かりません。数日後、格納庫に連れて行かれ、初めて「桜花」を見て驚きました。前半分が爆弾、操縦席の計器は3つしかない簡素さです。訓練用は黄色く塗られ、実戦用は薄



今回のインタビューは東京都世田谷区の世田谷山観音寺で行われた。ここには特攻観音堂があり、陸軍と海軍の二体の特攻平和観音尊像が奉安されている。毎月18日は「月例参拝日」である

水色でした。

「これを一式(陸攻)の胴体下に吊るして出撃し、目標の敵艦船付近で切り離す。高速で滑空しロケット噴射で体当たりする新兵器である。しかし重い「桜花」を抱いた一式は速度が遅い。目標に近づく前に「桜花」もろとも撃墜される恐れがある。お前たちの戦闘機隊はこれを護衛するのだ」と言われ、初めて任務が分かりました。

これはすごいものができた! 500ノットくらいで突っ込むなら敵に撃たれるよりも早い。即、轟沈だ!—まさに最強の部隊だと思いましたね。本来私はその「新兵器」に乗るつもりで希望して来たのですが、これを直掩する三〇六飛行隊で御奉公することになったわけです。

—第七二一航空隊には、「桜花」を運ぶ「陸攻隊」、実際に「桜花」を駆る「桜花隊」、そしてそれを掩護する零戦の「戦闘隊」があったわけですが、それぞれの部隊間の交流はあったのでしょうか。

野口 交流は全くなかったですね。ほかの部隊は兵舎も訓練場所も違います。ただ、陸攻隊の野中少佐のことは覚えております。わざわざ



今も野口氏の手元に残る、零戦パイロットだったころの飛行帽、ゴーグル、手袋。腕時計のバンドには階級章の桜が取り付けられ、その針は今も静かに時を刻んでいる

ざ戦闘機隊の宿舎に来られ、「いっちょ頼むぜ」とべらんめえ口調で、豪快な男っぷりのいい方でした。

彼らの訓練を見たこともあります。零戦で上がってはアイドリングで降りるのです。「桜花」の突入感覚を養うため、零戦でエンジン全開、全速のまま上昇、スイッチを切り降下しながら滑空、着陸をするという訓練を1日中続けていました。

次に黄色く塗った「桜花」の練習機での訓練です。搭乗員は1回限りの試乗で降下します。陸攻隊にとっては「桜花」の「投下訓練」であり、桜花隊にとっては「降下訓練」です。練習機は爆弾の代わりに水を入れ、降下し滑空、下についているソリで滑り込んで飛行場に着陸していました。ただし訓練では殉職者も出たようです。

彼らを掩護するため、私たちはひたすら訓練を重ねました。しかし合同訓練を行ったのは、昭和19年12月頃大分での一度だけです。我々戦闘機隊は、陸攻隊の編隊の上や下で、2機ずつ、あるいは4機ずつ、ジグザグに右に左に交叉しながら飛ぶという「バリカン運動」を行い、掩護の訓練をしました。

——第七二一航空隊は、その後九州の富高基地に進出しています。3月18日に九州は大規模



昭和20年2月、都城西陸軍基地での野口氏。背景には陸軍の四式重爆「飛龍」らしき機体が見える

な空襲を受けていますが、その邀撃戦が野口さんにとっての「初陣」ですね。その日の様子はどのようなものだったのでしょうか。

野口 邀撃に上がり、空戦が始まったのは朝7時過ぎのことです。一番機の西村少尉が「俺について来い」と言ってくれました。歴戦の一番機は上がってもすぐに戦わず、高度をとりながら、戦列から外れた敵機に優位である上から攻撃するというやり方でした。初陣の私は一番機についていくのが精一杯、上空にはF4Fが多く、敵機が火を噴いて墜落する姿にはじめは足が震えました。

銃弾は引き金の引き方次第で、あっという間になくなります。気がつくと、弾切れになっていました。敵は何度も来襲します。燃料と銃弾を補給し、すぐ上がっては空戦というように、午前、午後とそれを4回も繰り返しました。

そのうちに私もだんだん「くそ度胸」がついて、敵を見たら「コンチクショー！」と向かっていき、状況を判断して回避することもできるようになりました。俺にも十分できるぞ！と自信を持ちました。我々は敵機を何機も撃墜しましたが、こちらも被害甚大で、邀撃戦が終わると、零戦60機が30機程度にまで減っていました。

海軍では「初陣で死ななければ、しばらく大丈夫」と言われていました。しかしこの日、一緒に部隊を希望した同僚の島山は戦死しました。——18日の邀撃戦で親友を亡くされ、めまぐるしく19日に鹿屋へ移動、21日に「神雷桜花特別攻撃隊」の初出撃を迎えたわけですね。上空での戦いの様子をお聞かせください。

野口 21日の午前中、偵察機からの「四国の南方洋上に敵機動部隊発見、敵艦の上空に戦闘機なし」という報告が入り、神雷部隊に出撃命令が出ました。まず陸攻が「桜花」を抱いて

重そうに1機ずつ上がり、それから戦闘機が搭乗の順番に上がります。私が上がったのは、最後の方でした。上がる前に、桜花隊には報道班がついて写真を撮ったり「何か言いたいことはないか」と取材を行っており、多くの人が見送ってくれました。なにしろ一式陸攻が18機も出

て行くという、名誉ある初出撃ですから。

隊長からは「腕で守れなかったら身をもって守れ！」と指示されており、目的地まで何としても守れ！と意気込んでいました。私は編隊の左翼最後部で、陸攻隊の周囲を旋回したり、隙間をぬって上がったり下がったり、右へ行ったり左へ行ったり——、零戦2機ずつのバリカン運動で陸攻を掩護します。高度が上がると、冷気で油が凍って固まり、銃弾が出なくなりますから、上空では時々軸線を外してパンパンと機銃を撃ったりする必要もあります。

都井岬から1時間半ほど飛んだ頃、後方上空からいきなり撃たれました。ドラム缶をハンマーで叩くような音です。「しまった」と思いました。不意を突かれ、どこをやられたか分かりません。火は吹いていないので安心しましたが、方向舵が利かない、垂直尾翼を撃たれたと思いました。

敵機は私の左に出たので、高度を上げると、そのまた後ろにも敵編隊がいます。50機くらいはいたようです。入り乱れて空戦となり、味方の戦闘機も墜ちていきます。そして何機も火を吹いて落ちていく陸攻……。大きな火の玉になって墜落する陸攻を見やりつつ、私もそのまま墜ちていきました。方向舵が利かないため、機体を傾け、方向を変えながら降下して離脱し、南大東島に不時着しました。

零戦は通信性能が悪いのではじめから無線機を外しており、南大東島にも通信設備がなかったため、交信の手段がありません。パーツがないため応急手当ての修理で、翌日、鹿屋へ帰ったのですが、野中少佐率いる陸攻隊が「桜花」もろとも全滅と聞いて愕然としました。戻ってきた戦闘機も9機のみといえます。掩護できなかった……。初出撃で目標も見えないうちに……。無念です。零戦のような単座戦闘機ですと、撃墜された戦闘機の数だけ死んだことになりますが、陸攻は一機に7~8人乗っています。

「桜花」が敵艦に当たった瞬間は真っ黒な火柱が立ち、言いようのない気持ちになりました。

18機全滅ですから一気に戦死者は百何十人になります。

——全滅の報を受け、司令部は神雷部隊の編隊での攻撃を中止し、以後単機奇襲に切り替えました。神雷部隊は「桜花」による特攻と、50番(500kg)爆弾搭載の零戦による特攻部隊に改編されています。直掩戦闘機隊は転出し、野口さんも異動されておりますね。

野口 3月26日に私は神雷部隊から外れ、第二〇三航空隊の笠之原へ異動しました。笠之原も空襲を受けており、滑走路は穴だらけ、建物は破壊され兵舎すらなく、私たち搭乗員の宿舎は山の切り通しの横穴です。男20人の防空壕も兼ねた横穴生活は、しらみや湿気がひどく、毛布もじりじりして眠れず、毎日のように部隊の送迎バスで串良の町に出かけては、料理屋で飲食したりお風呂に入ったりしていました。もっとも下着は替えますが、飛行服は着たきりです。

二〇三空では二度目の被弾も経験しています。3月末頃、桜島の上空集合で邀撃に出撃する際、私は零戦の部品交換で上がるのが遅れ、先行する編隊を追って上がると、突如上空から銃撃を受けました。現れた相手はF4U4機。私の機体は火を吹いて墜落し、啜啜に落下傘で脱出、錦江湾で浮いているところを漁船に救助されたのは、3時間後のことです。

4月の菊水作戦では3~4回出撃しました。この頃の神雷攻撃は陸攻1~2機、これを戦闘機5~6機、または7~8機で掩護します。前回の悔しさもあり、目的地まで絶対射撃! と思いました。

沖縄の伊江島上空から見たときは、海が敵艦船で真っ黒でした。間断なく艦船から砲撃を受け、下が全然見えません。私は敵機を見つけたら「この野郎!」と果敢に攻撃しました。場数を踏み、鍛えられたせいか、まったく恐怖心はありません。

零戦の搭載機銃は13mm 4丁で、機銃の向き、軸線は自分で決めます。4丁ともクロスするようにしたり、2丁が交叉、2丁が直線など、いろいろと試したものです。私たち直掩隊は2時間半かけて沖縄に行き、30分空戦し、また2時間半かけて戻ってきます。帰投後はフラフラで、座席からしばらく立ち上がれないほどになります。それでも終戦までに、私は4機を撃墜しました。

「桜花」の確実な戦果はこくわずかとされていますが、私は一度だけ敵艦に「桜花」が突入するところを見ました。敵艦に当たった瞬間は真っ黒な火柱が立ち、言いようのない気持ちになりました。

——二〇三空は6月末に笠之原から築城に移り、九州全域の邀撃を担当することになります。戦争末期の本土防空はどのような状態だったのでしょうか?

野口 築城では、飛行機の半分が邀撃用、半分は爆弾を抱く、つまり特攻機になりました。特

攻機には投下機がなく、爆弾をワイヤーでくり、そのまま突っ込みます。

自分がいつ爆弾を積んだ機に乗るかは決まっています。毎朝、搭乗割を確認するのです。午前中が特攻待機で午後から邀撃、もしくはその逆というパターンもあります。私は技量的にいつでも突っ込めるので最後まで残されていたのだと思います。私たち邀撃部隊は最後まで「オクタン価91」の最高の燃料を使い、松根油などは使わず最高の性能で戦えました。

その頃は、ほぼ毎日邀撃に上がり、夜になったら夜間戦闘機と交代するという日々です。邀撃戦闘中に低空で回避した際、バンクを振ったにもかかわらず健康に配慮されていた味方の高射砲から撃たれたこともあり。幸い当たりませんでした。当時は味方撃ちも多かったのではないのでしょうか。

邀撃の相手はB-29です。下からみればキレイに編隊を組んで飛んでいるように見えますが、上空では高さが揃っていないので、死角がなく、下手に近寄ればこっかがやられます。

——やがて8月15日を迎えることになりましたが、玉音放送はどこで聞かれましたか。復員後はいろいろな「生き方の葛藤」があったとお聞きしておりますが、

野口 築城です。集合がかかりラジオを聞きました。玉音放送は雑音が多く、当初我々は陸下からの「もつとがんばれ」の激励だと思い、猛訓練です。すると大刀洗の陸軍の戦闘機が降りてきて「海軍さんはまだ訓練しているのですか。爆弾をください」と言ってきたのです。それで終戦と知りましたが、衝撃でした。「大分から司令が来るから軽拳妄動するな」と言われ、やむなく従いました。

復員は陸路、両親のいる群馬県桐生に向かいました。その途中、混雑した電車内で敗残兵」と言われ、とっくみあいの喧嘩をしたものです。9月に再び築城へ行き、退職金と米1俵をもらい、仲間と熱海の旅館「志ほみや」に米とお金がなくなるまで滞りました。桐生に帰ってからはしばらく呆然自失で、ある意味「抜け殻」でした。もう死ななくて済むのか、しかしこれから何をすればいいのか……、と。今まで一所懸命に「殺し合い」をしてきて、これからは正しく生きろ、民主主義だ、と言われても、どうやって生きればいいのか分かりません。

昭和21(1946)年に一人で東京に戻りましたが、気持ちを切り替えるのが難しかったですね。価値観の大転換にやけくそになり、ヤクザと喧嘩もしました。「怖い」という感情がないのです。我々は「特攻崩れ」「ヨ夕練」と蔑まれ、今思えば確かに半分「崩れ」ていました。気持ちを切り替えられたのは、昭和27(1952)年に民間航空が再開され、軍出身でもOKと聞いたときです。スイッチが入った感じで、昭和28(1953)年、海軍のOBが作った会社に就職、働きながら真剣に勉強し、民間の事業用パイロットのライセンスをとりました。

その後は東亜国内航空(後に日本エアシステムとなり、JALと合併した)の旅客機の機長など、ずっと空の世界で生きてきました。後輩の育成のため、定年後も83歳になった平成20年まで教官を務めましたよ。

——今や戦争を知らない人々が人口の75%を占めるといいます。過酷な時代を生き抜かれた先輩として、次世代に向けてメッセージをいただけますでしょうか。

野口 神雷部隊初出撃の生き残りは、もう一人となりました。世界中が軍国主義の時代に生まれ、国を守るため戦争に行くのは当たり前だったのです。平和な時代となりましたが、我々には「人がやれないことをやって来たんだ」という自負があります。私は海軍に入ってよかった。節度ある生活、礼儀、身についた海軍の教えは精神の支柱になっています。今の若い人も一度経験するといいかもかもしれません(笑)。自分だけよければいいのではなく、目標に向けて皆で助け合う「犠牲的精神」を知ってほしい。そうすれば当時の若者の気持ちも少しは理解してもらえらると思います。



野口剛 (のぐちたけし)
大正14年、東京都港区生まれ。昭和16年、海軍飛行予科練習生として16歳で海軍入隊(乙飛第16期)。昭和19年、第七二一海軍航空隊「神雷部隊」へ配属。昭和20年3月、初の「神雷部隊」出撃に際し、戦闘機隊の一員としてこれを護衛。同月、第二〇三海軍航空隊へ異動。築城で終戦を迎えた。戦後は民間航空会社に勤務。長く機長として旅客機を操縦し、定年後も平成20年まで教官を務めた。

